

スメタナ、ベドジヒ 1824~1884年。チェコの作曲家。ボヘミア国民楽派の創始者として知られ、「チェコ国民音楽の父」とよばれる。プラハでピアノと音楽理論を学び、貴族の家で音楽教師となつたが、当時から民族主義の傾向が強く、行進曲などを書いた。1856年から1861年にはスウェーデンで指揮者として活躍し、帰国後、国民劇場の前身となるプラハの仮劇場でオペラを作曲、主任指揮者となる。1866年に発表されたオペラ『売られた花嫁』は代表作。1874年に聴力を失うが、作曲活動をつづけ、交響詩『わが祖国』や、弦楽四重奏曲『わが生涯』などを発表した。

ボフラティア ⑤ P.14

わがそく『我が祖国』 ボヘミア（チェコスロバキア）の作曲家スメタナの連作交響詩。1874~1879年に作曲された。歴代の王をたたえる『ビシェフラーード（高い城）』、もっとも有名な『ブルタバ（モルダウ）』、自然を描写した『ボヘミアの牧場と森から』、戦いで有名になった城塞『ターポル』など6曲からなる。故国への賛美が、美しいメロディーにより、静かに、時に荒々しく表現されている。

ボフラティア ⑪ P.237

みんぞくしゆぎ 民族主義 民族の統一・独立・解放を主張する思想。主にヨーロッパ先進国の植民地とされ、資源をうばわれてきた地域で、帝国主義・植民地主義に反対し独立をめざす運動のささえとなった。第一次世界大戦を通じて、民族は自分たちの運命をみずから決めるという民族自決の考えが広まつていった。しかし、多くの植民地がきびしい解放闘争の結果、独立を達成したのは第二次世界大戦後のことである。経済的自立の道はなおけわしい。

ボフラティア ⑩ P.244

▼ チェコ国民楽派の創始者ベドルジーハ・スメタナ（一八二四年）は、「売られた花嫁」など八つのオペラと、数多い交響詩で知られています。多くは祖国の伝説や歴史などに基づいて作られた標題音楽で、とりわけ「わが祖国」が有名です。スメタナが民族復興の愛国心から標題音楽としてまとめ上げた晩年の傑作で、六つの交響詩からなる連作交響詩です。▼ スメタナは、オーストリア帝国の支配下のもとで、チェコ独自の文化を作り上げようとする運動に深く関わりました。チェコ国民音樂として記念碑的な作品を交響詩の連作という形で作ろうと考えたスメタナは、五年の歳月をかけて「わが祖国」を完成させました。なかでも有名なのが一八七四年に作曲され、かつてはドイツ語名の「モルダウ」の名で知られていた、第二曲「ヴルタヴァ」です。ヴルタヴァ川の流れに沿つてさまざまなチエコの風景が描かれていますが、最後に川がビシェフラーの丘に来ると、かつてのボヘミア国王の居城を歌つた第一曲「ビシェフラー」のメロディが流れています。▼ 全六作の初演は一八八二年十一月五日、プラハ国民劇場横のジョフィーン島にあるオーブニング曲として演奏されることが恒例となっています。

音楽祭「プラハの春」

チェコ・フィルハーモニーの創立50周年を記念して1946年に始まった音楽祭で、毎年スメタナの命日である5月12日から3週間にわたつて開催される。スメタナの組曲「わが祖国」で幕を開け、ベートーヴェンの「交響曲第9番」で閉幕する。今では、世界一流の音楽家が参加する、規模・内容ともに世界最高の音楽祭の一つになっている。音楽祭の期間中は、プラハの旧市街周辺のいたる所でコンサートが行われ、ドイツやオーストリアをはじめ、日本からもクラシックファンがつむかけれる。

オープニング曲の「わが祖国」を作曲したスメタナは、音楽を通してチェコの独立と民族の復興に情熱をそそいだ人物で、かれの「チェコ人の生命は音楽の中に」という信念は、チェコ人の心を代弁しているといえる。そうした意味で、「プラハの春」ということばは、チェコの人々にとって特別なひびきをもっている。

きみにもさきる国際交流 ㉙ P.9
偕成社

11月5日 ベドルジーハ・スメタナ「わが祖国」全曲初演
▼ 五年の歳月をかけて完成させた六つの連作交響詩

3国の社会問題



グリンカ

たるムソル
の世代にあ
たるムソル
を書き、次
基づいた曲
シア民族に
基づいた曲
がロ
グリンカ（1804～1857）が口
にしよ
うとするナショナリズム（民
族主義）が社会現象になっていた。そ
の動きは音楽界にも影響を与え、自
分の国に伝わる伝統音楽に目を向け
る作曲家たちが現れたんだ。

ヨーロッパ中に
広まつた国民音楽
ナショナリズムの影響は東欧や北
欧の国にも及んだ。チェコの独立運
動を支援し、「わが祖国」を作ったス
メタナ（1824～1884）や、ス
最初に影響が表れたのはロシア。
シア民族に
基づいた曲
がロ
グリンカ（1804～1857）が口
にしよ
うとするナショナリズム（民
族主義）が社会現象になっていた。そ
の動きは音楽界にも影響を与え、自
分の国に伝わる伝統音楽に目を向け
る作曲家たちが現れたんだ。

メタナと
もに国民音
楽を築いた
ドボルザク（1841～1904）、民族音
楽の研究者と
してても一流だったハンガリーのバル
トーク（1881～1945）、ロシ
ア支配下のフィンランドで愛国心を
訴え「フィンランディア」を作曲した
シベリウス（1865～1957）、
ノルウェーのグリーグ（1843～
1907）は、自然と民族を描くこと
を自らの務めと考えていたほどだ。
ロマン派音楽時代にあまり活動が
目立たなかつた国でも、新たな作曲
家たちが登場した。

学習まんがシリーズ
名探偵コナン 推理ファイル 音楽の謎

P.70



ナショナリズム、印象派、表現主義……多彩なアプローチの時代！

近代の西洋音楽

民族音楽のうねり：19世紀後半から20世紀
品が生まれた時代だった。

70



シベリウス



「プラハの春」音楽祭の会場となるスマタナホール。

チェコ

チェコではローマ・カトリック教徒がもっとも多く、人口の約40%をしめる。ついでプロテスタントが約5%、東方正教会の信者が約3%で、人口の約40%はとくに信仰する宗教をもっていないといわれている。

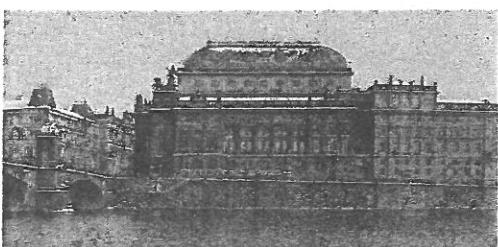
なお、中欧には、戦前ユダヤ人ゲットーが各地にあったため、シナゴーグ（ユダヤ教会）やユダヤ人墓地も多い。プラハの墓地には（写真右）、場所がないため、墓石が重なるように置かれている、ユダヤ人の差別と迫害の歴史をかいめ見ることができる。



*ゲットー：かつてユダヤ教徒は、街のいちばんせまくて不便な場所に、強制的に住まわされていた。この定められた地区をゲットーとよんでいる。

チェコ文化は、チェコ人・ドイツ人・ユダヤ人の文化がまじりあつたもので、豊かで多様な美術や音楽、文学を生み出してきた。初代大統領に就任したヴァーツラフ・ハヴェルは高名な劇作家であるし、1984年にノーベル文学賞を受賞した詩人ヤロスラフ・サイフェルトもチェコの出身だ。

また、チェコ人にとっては、自国の文化はチェコ語と切り離しては考えられない。かつて19世紀にドイツに支配され、ドイツ語が強制されていた時代に、チェコ語によるチェコ人のための国民劇場をつくり上げたのも、その一つのあらわだ。



チェコ人の誇り、国民劇場。

P.44

ヨルニモゼウス国際交流(2) 借用

ボヘミアはスメタナが生まれる二世紀も前にオーストリア・ハプスブルク帝国の領土になり、チ

215

P.215, 216, 217

エコ人たちは政治・宗教・言語の自由を奪われて、ドイツ語とカトリック教を強要された。単に強要されただけではなく、カトリックへの改宗を拒んだりドイツ語を拒否したボヘミア貴族たちは、殺されたり、国外追放になつたりした。

チエコ語と、チエコ人の文化は、貧しい民衆や、職人や、農民の間にしか残らなかつた。

こうした民族受難の時代が長い間つづき、国民の、主として中・上流階級がすっかりドイツ化された時代にスメタナは生まれ、何の疑いも持たずにドイツ文化を吸収して育つたのである。

スメタナの両親はチエコ語とドイツ語の両方を使い、一家の使用人やビール職人たちはチエコ語を話していたが、スメタナはドイツ語で教育を受け、母国語を話し書くことの重要さに長いこと気が付かなかつた。

彼が青年期に入る一八四〇年代から、ボヘミア貴族や文化人の間でチエコ民族の権利を取りもどす戦いが密かに始まり、一八四八年にはフランスの「二月革命」に触発されてプラハでも革命が勃発したが、アツという間にオーストリアに鎮圧され、ボヘミア全土はより強固な弾圧の下に置かれてしまつた。

民族独立の動きは芽の中に摘み取られ、オーストリア政府は警察力を強化して厳しい監視の目を光らせた。

このような中で、民族復興をめざすチエコ人の政治家や貴族や学者たちが、国民劇場の建設という一大目標に向かつて突き進んで行く姿は、感動的である。

民族独立の象徴が「劇場」だということは日本人にはなかなか理解しにくいかもしねないが、ヨーロッパではオペラや演劇が文化の上でそれだけ重要な役目を果しているのだ。

当然、チエコ人たちが劇場を建てるにもオーストリア政府の許可がいり、それを取りつけた後も革命や独立の動きがあれば建設計画は何年間も中止に追いこまれた。国民劇場が計画から完成までに約四〇年間、建設用地購入からさえ三〇年近くを要したのは、チエコ人が貧しかつたこともさることながら、時代と政治に阻まれたからである。

「入門外 音楽は422人の命！」 ひのまどか著 リブリオ出版

筆しておられた人は、(2)

(2)

こうしてベツジフが仕事と勉強に充実した日々を送っていた一八四五年春、プラハで秘かに、「愛国委員会」なるものが結成された。メンバーは、民族復興運動を目指すチェコ人の政治家や学者や実業家など、一二〇名だった。この時ボヘミアは、国家としての主権を失つてから二世紀余りがたつていた。

チェコ人の国ボヘミアの歴史は、宗教をめぐる戦いの歴史でもある。

国を興したのは九世紀初めの伝説上の女神リブシェと言われるが、その後カトリック（キリスト教の一派）の布教が行われ、ドイツ人も多数入ってきて経済的にも発展した。十四世紀半ばの名君

カレル一世の時代にはボヘミア王国の名で大いに栄え、首都プラハには中央ヨーロッパ最古の大学「カレル大学」が創設され、プラハはヨーロッパ文化の中心地とまで言られた。

しかし後を継いだヴァーツラフ四世は凡庸で、父の遺産をことごとく失つた上、カトリック教会の権力を増長させてしまった。国民は教会と堕落した聖職者たちに苦しめられた。こうした中でカレル大学総長で司祭のヤン・フスは、教会の腐敗を摘発し宗教改革を呼びかけて、一大国民運動に発展させた。この動きを恐れたローマ教皇はヤン・フスを宗教會議にかけた上で火あぶりの刑に処してしまった。

チェコ人は憤怒し、フス教徒の名で団結して反カトリックの戦いを起こした。

これが「フス戦争」である。

ローマ教皇はボヘミア王位をねらうドイツ皇帝と結託して十字軍を組織し、六度にわたつて攻め入ってきた。しかしフス教徒は毎回十字軍を撃退し、國と、フスの精神を継いだ「新教」を守った。その後約一世紀の間カトリックと新教国ボヘミアの間には政治的妥協の時代がつづいたが、一六一七年、オーストリア皇帝に即位したフェルディナント一世は新教弾圧に乗り出し、再びカトリック連合軍とボヘミアとの戦いが始まった。この戦争は一六一八年から四八年まで三〇年間もつづいた。故に「三十年戦争」と呼ばれている。この間の一六二〇年、プラハ西方のビーラー・ホラ（白山）の戦いで連合軍に惨敗したボヘミアは、國民の三分の二を失い、國土はオーストリア帝国の領土にされて、チェコ人は民族としての独立を完全に奪われたのだった。

トリックとドイツ語が強要され、これを拒んだ者は処刑されたり国外追放になつたりした。残つたチエコ人は政治的にも文化的にも息を止められ、社会のあらゆる面でドイツ化政策に従わなくてはならなかつたのだ。

チエコ人の言葉チエコ語は都會や教育の場から消え、小学校でもギムナジウムでもドイツ語で授業が行われていた。名門カレル大学においても教育はドイツ語とラテン語で行われた。それどころかドイツ人の教授や学生は大学からチエコ人を追い出そうと企んでいたのである。チエコ語は今は「農民の言葉」とさげすまれ、貧しい民衆の間や農村にしか残っていない、と思われていた。

ところが、これほどの民族的抑圧の中でも、秘かにチエコ語とチエコ固有の文化を守りつづけ、将来必ず訪れるであろう民族復興の時に備えて愛国運動を実行している人々がいたのである。

一二〇名の「愛國委員会」メンバーはその代表者たちだが、国内には同じ志を抱く知識人が何千人も何万人もいた。たとえばベツジフが短期間しか通わなかつたユングマン国語学校の校長ヨゼフ・ユングマンは、五巻の「チエコ・ドイツ語辞典」を編集してチエコ語の独習を可能にしていたし、より身近な人、ブルゼニュのスマタナ教授も学生たちにチエコ人としての誇りを忘れさせないようにチエコ語で授業を行つていた。

ベツジフは教授から常々、

「今に必ずチエコ語が使われる時代がやつてくる」

と言われていたが、深く考えはしなかつた。実際に生活はドイツ語で當まっていたし、ドイツ語を暢に話せたからこそ今度の仕事にも就けたのだから……。

新たに発足した「愛國委員会」は最初の活動として「チエコ人のためのチエコ語のオペラと劇を上演するための劇場」を建てる計画を練つていた。

劇場を建てるには莫大な建設資金を用意しなくてはならない。

しかし国の経済はドイツ人やオーストリア人の手に握られてきたため、大方のチエコ人は貧しく、どうすれば必要な金が集められるか分らなかつた。

それでも委員会はこの劇場こそ民族復興のシンボルになると考え、國中に募金運動を展開することにした。合言葉は、

「どんな小額でもいいからカンパしよう。まず一步を踏み出そう！」

こうしてチエコ人たちは、國の主權を取りもどすための氣の遠くなるような道のりを歩み始めたのである。